

文化・芸術

「十二分割円の開花(A)」

1983年、油彩・カンバス
100.0cm×100.0cm

大川美術館蔵

オノサト・トシノブ (1912~86年)

1960年代、画面いっぱい細かく連続した四角形の色面を重ねた「分割円」を発見したオノサト・トシノブ。70(昭和45)年代以降になると、弧形、同心円、まんじ形やともえ、三角形、六角形、星形、十二分割された円、正方形に内接する円などの形態が、次第に複雑さを増していきました。

「光を私は、私の内部から見つけないと思う」と書いたオノサト。一貫して「色面即形」のオノサトの平面芸術は、80年代、いっそう明快なものとなっていきます。その絵画に相對する者は、まるで目を射られるような衝撃を受けることでしょう。大胆な形と色の並置、完全なる正面性の定着が示されました。

桐生のアトリエで、自らの生命をはらんだ絵画の新しい美しさに挑み続けたオノサトでしたが、本作を描いた3年後の86(昭和61)年、74年の生涯を閉じました。

(小此木)

※「生誕110年みんなのオノサト・トシノブ展」は19日まで。

《名画の扉》「生誕110年 みんなのオノサト・トシノブ展」から

